

一八八三年十二月二十七日(木)

タクール、聖ラーマクリシユナのカルカタ訪問

イシャン・ムコパッタエ氏の招待を受けて――

ドツキネシヨル
南神村のカーリー神殿で早暁の献灯アーラテイがはじまり、甘い音色が聞こえて来た。やがて、音楽塔ナハバトからの
ロシヤン・チヨウキ
楽ウキ曲がそれに交じってくる。タクール、聖ラーマクリシユナは起き上がり、やさしい声で称名していらつしやる。それから、部屋に飾つてある神々や女神の絵像に一つ一つ合掌してあいさつなされた。西側の円ペランダに出られて、バギーラテイ(ガンガー)を眺めて合掌された。泊まり込んでいる信者たちの誰彼が、朝の行事をすませてから次々とやつてきて、タクール、聖ラーマクリシユナにごあいさつ申し上げた。(訳註、ロシヤン・チヨウキ――縦笛シナイや太鼓等の楽器で演奏する楽曲。バギーラテイ――元は天上を流れていたガンジス河をバギーラタ王がきびしい苦行の末、地上を流れるようにしたため、彼の名前をとつてガンジス河はバギーラテイと呼ばれる)

ラカールはタクールといつしよにここで暮らしている。バブラームは前夜から来ていた。モニはタクルのところ今日で十四日間滞在している。

今日は木曜日、オグロハヨン黒分十三日目。キリスト暦一八八三年十二月二十七日。今日は朝のうちにタクールは沐浴その他をすませて、カルカッタへ行く用意をしていらつしやるのだ！

「聖ラーマクリシュナはモニを呼んでおっしゃった——」イシヤンのところへ今日は行くことになっているんだよ。バブラームも行くし、お前も行くよ。わたしといっしょに」

モニは行く準備にとりかかった。

冬、寒い時期だ。八時ころ、音楽塔のそばに馬車が来て停まった。タクールがお乗りになる馬車である。あたり一面に花の木。前方はバギーラテイ（ガンガー）。すべては喜びにかがやいている。聖ラーマクリシュナは神々の絵像にもう一度あいさつをされて、マールの名を称えながら住居すまいをはなれ、馬車にお乗りになった。お伴はバブラームとモニ——。彼等は、タクルの幅広い毛糸ウールの肩掛けと毛糸のものをお着せするつもりである。

タクールはニコニコ顔。道中はじめから終わりまで大変な上機嫌で行かれた。九時ころ、馬車はカルカッタ市内に入りシャームバザールを通つて、やがてメチュアバザールの十字路に差しかった。モニはイシヤンの家を知っていたので、十字路を曲がってイシヤン家の正面に馬車をつけるように指図した。

イシヤンは尊敬と愛情のこもった笑みを満面にたたえながら、家族ともどもタクールをお迎えして、階下の応接間にご案内した。タクールは信者たちと共に席にお着きになった。

互いに近況や健康をたずね合った後で、タクルールはイシヤンの息子スリシユと話をなされた。スリシユは修士(M・A)と法学士(B・L)の試験にパスして、アリプールで法律の仕事をしている。

大学時代には、入学試験とF・A試験で一位をとったほどの音にきこえた秀才であるが、まことに謙虚な人で、一見したところ何も知らない人のようにみえる。年齢は三十歳くらいのはずだ。スリシユは合掌してタクルールを拜した。モニはタクルールに彼のことをいろいろ紹介し、「こんなに落ち着いた静かな人物はほかにおりません」と付け加えた。

〔仕事に束縛されている人間への特効薬——罪な仕事——カルマ・ヨーガ〕

聖ラーマクリシユナ「(スリシユに向かって)君、何をしているの?」

スリシユ「はい、私はアリプールで法律の仕事をしております」

聖ラーマクリシユナ「モニに向かって)こういう人が法律の仕事だつて? (スリシユに)ウン、君、何か質問があるかい? この世で無執着の生活をする方法とかさ?」

スリシユ「でも、この世で仕事をしていれば、いろいろ良くないこともしなければなりません。罪なことをする人もあり、善いことをする人もあります。これはみな前世のカルマの結果で、そうするより仕方がないのでございませうねえ?」

聖ラーマクリシユナ「仕事はいつまでだろうね! 神をつかむまでだよ。あの御方をつかめば、すべては解決する。そのときは、罪と徳を超えてしまふんだよ。」

実が見えてくると花は落ちる。花が見えるのは実を結ぶためだ。

規則通りの礼拝勤行はいつまですればいいと思う？ 神の名を口にするると髪が逆立って涙がこぼれるようになるまでだ。こういうことはみな、神様をつかんだ証拠、神に純粹な信仰をもった証拠だ。

あの御方を知ったら、罪と徳を超えられる。

ブラサード言いぬ——享樂と解脱

両方ともに別れを告げて

カーリーとブラフマンの一つなるを知って

正義も不正義もみな捨てた

あの御方の近くに行けば行くほど、あの御方は仕事を減らしてください。嫁が妊娠すれば、姑はだんだん仕事を減らしてくれる。十ヶ月になれば、ほんの僅かにしてくれる。赤ん坊が生まれたら、そいつを抱いてヨシヨシとあやして大喜びだ！」

スリシュ「世間で生活をしていますと、あの御方に近づくことは非常に困難でございます」

〔世間で暮らす人への教訓——訓練のヨーガと独居修行〕

聖ラーマクリシュナ「なぜだい？ 訓練のヨーガは？ わたしの郷里では、大工のおかみさんが押

し米をつくって売るが、まあどんなにすばしっこく仕事をこなすか、きいてごらん。杵はしよっちゅう臼の中に落ちてくる。その合間に手で米をひっくり返す。空いてる手で赤ん坊を抱いて乳を飲ます。買い手がくると杵を絶えず落としながらちゃんと言をする。『じゃあお前さん、こないだ貸した何パイサかを返しておくれ。そうしてから品物をもつてお行きよ』

見ろ、赤ん坊に乳を飲ます、杵を動かす、お米をひっくり返す、できた押し米を取りだす、その上、買い手と商談だ。一ぺんにしているんだよ。こういうのを訓練のヨーガというんだ。だが、十五アナの心は杵の落ちる方へ向けて、手の上にそれが落ちないようにしている。わずか一アナの心で、赤ん坊に乳を飲ませたり客と話したりしているんだよ。(ルビーが十六アナなので、ほとんど九十パーセントくらいという意味)これと同じように、世間で暮らしている人は、十五アナ分の心を神の方に向けていない。そうしないと、何もかもダメになってしまう。死の手に落ちてしまうよ。あとの一アナでいろんな仕事をしろ。

智慧を身につけたら世間で暮らせるよ。まず、智慧を身につけることが肝要だ。世間の水に心の牛乳を入れると混ざってしまう。だから、心の牛乳を固まらすために、人気のない静かなところをかきまぜてバターにすれば、世間の水に入れても平気で浮いている。

だから、修行が必要だと言うのさ。はじめの間は、一人で静かな処に住むことが大そう重要なのだ。菩提樹の木も若いうちは柵で囲ってやらなければ、山羊や牛に食べられてしまう。でも太くたくましくなれば、柵をとってやる。もう象をつないでも大丈夫だからね。

だから、はじめのうちはときどき静かなところで一人になりなさい。修行は必要だよ。飯を食べた
いとき、坐ったままで、『薪は火を含み、その火で米を煮ることが可能だ』なんて言ってるだけで、
飯が炊けるかい？ 木切れを拾ってきて、こすり合わせて、はじめて火がおこるのさ。

大麻を飲むと酔ったようになって、とても愉快になる。飲みもしないで、何もしないで坐っていて、
『大麻、大麻！』と言ったところで、酔いもしないし愉快にもならないだろう？』（訳註、シッデイ——神
に捧げる飲み物で、すりつぶした大麻などの気分を高揚させる麻薬性、中毒性の成分を含んでいる）

〔神の体得——人生の目的——世俗の知識と本当の知識——牛乳を飲むこと〕

「どんなに学問しても、神への信仰バクティがなかったり、神を知ろうという気持ちがないなら——すべては
無益だ。識別力グニウエーカも離欲ヴァイラーギの気持ちもないただの学者は——連中は女と金にはかり目を向けている。ハ
ゲタカは空高く舞い上がるが、墓穴にはかり目を向けている。

あの御方を知るのに役に立つ知識、それらが本当の知識というものだよ。ほかはみな間違いだ。無
益なことだ。

ときに、君は神についてどんな考えを持っているのかね？」

スリシュ「はあ、こんなふうと考えております——一人の智慧そのものである魂が存在する。そし
て、その方の創造活動を観察すれば、その智慧のほどがわかるのです。例えば、寒冷地において魚そ
の他の水生動物を生かしておくための工夫です。温度が下がるほど水の量は減少するのですが、驚い

たことに、氷の張る少し前から水は軽くなってきて、量が増してくるのですよ！ 池の水がうんと冷めなくなっても魚は生きていけます。水の表面には氷が張っても、下の方はちゃんと水のままなのですから——。非常に寒い風が吹いても、その風は氷の表面をなでるだけで下の水の温度はあたたかく保たれているのですよ」

聖ラーマクリシユナ「神様がいらつしやることは、世の中の有様をよく観ればわかることだよ。けれどね、あの御方のことを聞くのと見るのでは別だし、あの御方と話をするのは又、別のことだよ。ある人は牛乳のことを聞く。ある人は牛乳を見る。またある人は牛乳を飲む。見れば嬉しくなるだろう。飲めば栄養がついて人は丈夫に元気になる。神と対面すれば心は平安になるだろうよ。そしてあの御方と話し合ったときはじめて、本当の歓喜を知って力を増すんだよ」

〔解脱したいという熱望——神を求めて夢中になる時期〕

スリシユ「あの御方を呼ぶ時間がありませんので——」

聖ラーマクリシユナ「ハハハハハ、そりやそうだ。時がこなけりや何ごともできない。子供が寝るとき母親に言った。『お母ちゃん、おシッコのとき起こしてね』母親は答える——『坊や、おシッコがお前を起こしてくれるよ、母さんが起こさなくてもね』

各人に与えられるものは、あの御方がすべて正確に計つてある。はかり皿しよらひらでしよらひらが嫁たちにご飯を分けてやっていた。嫁たちはいつも不足に思っていた。ある日、はかり皿が壊れてしまったので嫁た

ちは大喜びした。ところが、姑さまがおっしゃるには——『踊って喜んで、泣いて喜んで一向かまわなけれどね、嫁たちや。でも私は、掌てのひらでも計れるんだよ』

〔全権委任または代理権を委譲せよ〕

「(スリシュに向かつて) どうする? あの御方の足許あしもとに何もかも差し出してしまえ。あの御方に全権委任状を渡せ。あの御方がいいようにして下さる。立派な実力者に任せてしまえば、その人は悪いようにはしないよ。

修行サダチはたしかに必要だ。だが、二種類ふたの求道者サドガカがあつてね——猿サの仔コのタイプタイプと猫ネコの仔コのタイプタイプだ。猿の仔は自分で一生懸命になつて母親にしがみついている。こういうタイプの求道者は、これだけ称名して、これだけ瞑想して、これだけ修行をつめば神を覚ゆるだろうと考えている。自分で努力して神をつかむんだ。

けれども、猫の仔は自分で母親につかまることが出来ない。横になつて、ただミャーミャー母親を呼ぶだけだ! 母猫はどうするか。母猫は時にはベッドの上にのせたり、時には屋根裏の薪のかけなにかに置いてくれる。口でくわえてあちこち連れて歩くが、仔は自分で母親につかまらなことを知らないんだ。こういうタイプの求道者は自分でいろいろ工夫して修行できない。何回称名しようとか、何時間瞑想しようとか、そういうことができないんだ。この人はただもう夢中になつて泣き叫ぶだけだ。あの御方はその泣き叫ぶ声を聞くとジツとしていらなくなつて、こつちへやつてきて会つて下さる」

時間なので、家の人びとは食事の用意をしてタクルに召し上がっていただけこうとしている。そのため大忙しだ。主人のイシヤンは、奥の方に行つてあれこれに見回つたり指図をしたりしている。

もう時間なので、タクルは待ちきれないようなご様子で部屋のかなを行つたり来たりしていらつしやる。でもニコニコ顔だ。キールタンの歌手ケーシヤブと時々言葉を交しておられる。

〔神が行為者——仕事における個人の責任〕

ケーシヤブ歌手「行為^{ケカラナ}と原因^{ケイラナ}はあの御方だけでございます。ドウルヨーダナは(クリシユナに)申しました。『主よ、あなたは私の胸に住み、あなたの動かす通りに私は行動します』と」

聖ラーマクリシユナ「そうだよ、ハハハハハ。たしかにあの御方が何でもおさせになるんだ。あの御方が動かし手(主人)で、人間は道具のようなものさ。

それから、行為の果報があることも本当だ。赤トウガラシを食べると胃のなかで焼けるようだ。あれを食べると胃が焼ける、と決めて下すつたのはあの御方だ。罪を犯せばその結果を背負^{シヤ}わなければならない。

完成した人——神を覚つた人は、しかし、決して罪を犯すことができない。歌の達人は音階を外さないよ！ サ・レ・ガ・マ(インドのドレミファ)の音を正確に出すよ」

食事の用意ができた。タクルは信者たちと奥の部屋に行つて席にお着きになった。バラモンの家

柄なので、各種のカレーやその他のいろいろな種類のおいしいお菓子を準備してあった。

時計が三時を打った。食事を終えられた聖ラーマクリシュナは、イシャン家の応接間に戻ってお坐りになった。そばにスリシュと校長が坐っている。タクルルはスリシュと再び話をはじめられた。

聖ラーマクリシュナ「きみはどんな態度？ 我は彼(神)なりか、それとも主人と召使いかね？」

〔在家の人には智慧のヨーガか、それとも信仰のヨーガか？〕

「世俗の生活をしている人にとっては、主人と召使いの態度が大そういいんだよ。世間並みのいろんなことをしている人にとっては、主人と召使いの態度が大そういいんだよ。世間並みのいろんなことをしている状態で、私こそソレ(神)だなんて、言えるはずがないだろう。私こそソレである」という人にとってはこの世は夢幻だ。自分の体も心も夢幻、その人のワタシというやつも夢幻だから、世間での仕事は何一つ出来ないはずだよ。だから、神を主人と思い、自分を召使いと思う態度がとていいわけだ。

ハヌマーンは召使いの態度をとっていた。ラーマに向かってハヌマーンはこう言ったよ——『ラーマよ、あなたを全体フルナと思うとき、私はその一部分です——あなたが主人なら私は召使い。そして大原理の智識タクルル・ジュニヤが生じたときには、あなたは私、私はあなたナになります』

大原理の智識にあるときは、ソールハム我はソレなりナになるけれども、そりやまだ先の遠い話だ」スリシュ「はい、おっしゃる通りです。召使いの態度で人間は悩みから解放されます。すべてを主人に任せておけます。犬が主人に献身して、すべてを任せて安心するように——」

〔有形の神と無形の神は同一——御名の偉大さ〕

聖ラーマクリシユナ「ところできみは、形ある神が好きか、それとも無形の神の方が好きか、どっちだい？ 無形の神が形ある神だということがわかつているかな。信仰者の目には、あの御方は形ある神として見えるんだよ。無限の水、岸の影も見えない大海原だ。その水があちこち凍っている。ひどい寒さで凍ったんだよ。ちょうどそんなふうに、信仰の凍結力^{かたまる}で形が見えるようになるんだ。また太陽が昇ると氷は溶ける——それと同じことで、水は元通りの水になる。つまり、智慧の道^{ジニチャーナ}——^{ヴィチャール}分別の道を通つていくと神の形は見えなくなる。すべて無形となる。智慧の太陽が昇ると、形をなした神の氷はだんだん溶けてしまう。

でも、わかるだろう。無形の神が形ある神(人格神)だということだ」

夕闇せまるころ、タクールは立ち上がられた。^{ドフキネーシヨル}南神村にお帰りになるのだ。応接間の南側にポーチがあつて、そこにお立ちになったタクールはイシヤンと話していらつしやる。その辺で誰かが言つた——「至聖^{かみ}の名をいつも称えていても、必ず効果があるとは限らないと思ひますが——」

それを聞いてイシヤンが言う——「何ですと！ 菩提樹^{アスワツタ}の種はたしかに極く小さいものですが、あのなかには大きな大きな菩提樹が入っているんですぞ！ 後でちゃんと木があらわれてくるのです」

聖ラーマクリシユナ「そうだ、そうだ、後になつてちゃんと実を結ぶのさ」

〔イシヤンは世俗に巻き込まれない世俗人——大覚者の境地〕

イシヤンの家は彼の義父であるクシェートラナート・チャトジェーの家の東隣である。両家の間に通じる道がある。チャトジェー先生宅の門のところへ行つてタクールはお立ちになった。イシヤンは友人ともどもタクールを送つて馬車にお乗せした。

タクールはイシヤンに向かつておつしやる——

「お前は泥魚みたいにして世間で暮らしているね。泥魚は泥のなかに住んでいるが、体に泥が全く付かないんだ。

この現象の世界には、知（明）と無知（無明）の二つがある。大覚者とはどういう人物をいうのかわかるかね？ それは白鳥のように、牛乳と水の混ざつたところから水をよけて牛乳だけを取り出せる人だ。蟻のように、砂と砂糖の混ざつたところから砂糖だけを取り出せる人のことだよ」

聖ラーマクリシュナの万教調和——神の分身に錯誤はない

日は暮れた。信者ラーム・チャンドラの家にはタクールはおいでになった。ここに立ち寄つてから南神村にお帰りになる予定である。

ラーム家の応接間には燈火がつき、タクールは信者たちと共に坐つていらつしやる。マヘンドラ・ゴースワミー氏と話をしておられる。ゴースワミーの家はこのすぐ近くなのだ。タクールは彼がお好きだ。タクールがラームの家にいらつしやると、必ずといつていほど彼もやってきてタクールにお

会いするのである。(訳註、ゴースワミー——ヴィシユヌ派の説教師の称号)

聖ラーマクリシユナ「ヴィシユヌ派もシャクテイ派も行き着くところは一つだ。でも、道がちがう。ほんとうのヴィシユヌ信者は、シャクテイ派の人を嫌ったりしないよ」

ゴースワミー「はっはっはっは。シヴァとパールヴァティ(シヴァの配偶神)は、私どものお父さんとお母さんでございますから——」

聖ラーマクリシユナ「ハハハハハ、(英語で)サンキュー。お父さん、お母さん」

ゴースワミー「他人の悪口を言うこと、ことにヴィシユヌ信者の悪口を言うことは罪になります。ヴァイシユナヴァ誹謗ひぼうの罪です。すべての罪は許されても、ヴァイシユナヴァ誹謗の罪は許されません」

聖ラーマクリシユナ「罪とか間違いかいいうものは、誰にでも通用するわけじゃないよ。チャイタニヤデーヴァ様のアヴァタのような神の化身には、そんな言葉は通用しない。

もし子供が父親につかまって狭い縁へりを歩いているのなら、足を滑らして溝の中に落ちることもある。だが、父親が子供の手をしっかりとつかんでいる場合は、子供は決して滑り落ちたりしない。

まあ、聞いてくれ。わたしはマーに清浄な信仰バクティを下さるようにとお願いした。マーにこう頼んだのだ——『ここにあるあんたの正義ダルマと不正義アダルマを取り去って、わたしに清い信仰をおくれ。ここにあるあんたの浄と不浄を取り去って、わたしに純粹な信仰をおくれ。ここにあるあんたの罪と徳を取り去って、わたしに純粹な信仰をおくれ』とね」

ゴースワミー「はあ、おっしゃる通りです」

聖ラーマクリシュナ「あらゆる意見に敬意を表しておいて、しかも堅信ニシユタというものがあるんだよ。すべての人にあいさつするのは結構なことだよ。だが、一つのことを命がけで愛するのが堅信ニシユタだ。

ハヌマーンにとっては、神はラーマの姿だけ、ほかのどんな姿にも関心がなかった。

牛飼ゴウビ乙女ビたちの堅信ニシユタときたら、ドウワラカで王者のターバンを巻いたクリシュナの姿を見ようともしなかった。

妻は夫の兄弟や他の親戚の人たちにも足を洗う水を運んでやったりしてサービスするが、夫に対するサービスと同じことを誰にだってしやしない。夫との間柄は全く別だからね」

ラームはタクールにお菓子を供養した。

タクールはやがて南神村ドフキネンシヨルへ向けて出発される。モニから毛糸ウールの肩掛けと帽子を受けとって身につけられた。耳までたっぷり覆われる帽子である。タクールは信者たちと馬車にお乗りになる。ラームはじめ信者たちが手をそえてタクールを馬車にお乗せした。モニも乗って南神村ドフキネンシヨルへ戻った。